

文法参考書の執筆に長年携わって思うこと

三村 浩一

1. はじめに

筆者は高校教員になって、13年目の1988年に初めて文法総合参考書の執筆をした。『REFRESH 高校基礎英語』金山崇(監修)(1989)数研出版を5名の教員と分担執筆して、その大変さとやりがいを体験して、執筆の面白さに嵌まった。特に、教材を使う立場と作る立場を2つ経験したことが教員としての視野を広げるのに役立ったのではないかと思う。その後、縁あって35年にわたって、いくつかの数研出版の文法参考書や教科書の編集に関わって来た。この間、学習指導要領の改訂や英語教育を取り巻く潮流の変化などがあり、教材作成もその流れとは無縁ではいられなかった。この機会に私の文法参考書の執筆経験を披露することも何かの意義があるのではないかと思い稿を起こすことにした。

2. 学習指導要領と文法教科書・文法準教科書

筆者が高校に勤務し始めた1976年にはその3年前に実施された学習指導要領の下、英語A、英語B、初級英語の科目があったが、英語Bの教科書は「読本」「作文」「文法」の3種目に分かれていた。それ以前の学習指導要領では英語Bに「作文文法」の教科書があった。それが、1982年実施の学習指導要領では英語I、英語II、英語IIA、英語IIB、英語IICの科目それぞれに対応した教科書が発行され、「文法」の教科書はわずか9年で消えてしまった。なお、科目名と教科書名が一致しないのは1973年実施の指導要領までであった。このあたりの事情は久保野(2016)が詳しい。

さて、現場では文法教科書が消えることへの危惧からか、1982年から文法の「準教科書」を使って週一回程度文法指導をするのが通例になった。その流れは1994年実施の学習指導要領下でも変わらず、「オーラルコミュニケーション」の時間を文法指導にあてる「オーラルグラマー」なる造語も生まれた。

また、週一回程度では心許ないと参考書を購入させて家庭学習で補うことも多くなったと思う。筆者が『ラーナーズ高校英語』田中実(監修)(1991)[2021からは『ビッグディッパー高校英語』]、『デュアルスコープ総合英語』小寺茂明(監修)(1998)の執筆に関わったのはこの時期である。

2013年実施の学習指導要領で新設された「英語表現」は本来speakingとwritingを扱う科目であるはずなのに、文法の準教科書と見まがう教科書が現場で歓迎された。準教科書の教科書化と言えよう。また、英語表現の教科書と同名の文法参考書が発行され、教科書と文法参考書のリンクという仕掛けも定着した。

2022年実施の学習指導要領では「英語表現」を引き継いだ「論理・表現」が設定され、文科省は前回の反省から文法教科書色を押さえるべく指導したのか、教科書は文法ベースのものが少なくなったようである。この新課程に合わせて、『アースライズ総合英語—Practical English Grammar and Expressions』を監修・執筆した。英語のタイトルからもわかるように、実用的な英語の文法と表現に力を入れている。

3. 文法記述の正確さに関して

英語参考書や大学入試問題の誤りを指摘する書物が1980年ごろから目立つようになったと記憶している。誤りを払拭できないのは、執筆者や作問者の勉強不足が大きかったのではないか。また、まだ英語を母語とする信頼のおける校閲者を活用できていなかったのではないか。最初に読んだのが、河上(1980)であり、目から鱗が落ちた。これまで学んできたことが何だったのだろうか愕然とした。例えば、次のような例をあげている(同書p.3)。

doubt は肯定形のときはif または whether を伴い、否定形のときは that を伴う。

これに対して、筆者は「肯定のときに that を使えないという説は正しくない」と断じている。また、当時の多くの文法参考書には、

It is easy that I do the work.

It was happy that he did not die.

などの例文が堂々と載っていた。それぞれ、

It is easy for me to do the work.

Happily, he did not die.

とすべきである。

私は文法参考書の執筆にあたっては、誤り訂正本はもとより、できるだけ多くの欧米の文法書を参照するように当時から心がけている。ネイティブの校閲も鵜呑みにせず吟味している。また最近ではコーパスも活用している。

〈cannot but+動詞の原形〉は誤りではないが、私の関わった書物では時代とともに記述を少しずつ変えている。『REFRESH』では「cannot but+動詞の原形=cannot help ~ing と同じ意味をあらわすことがある」、『デュアルスコープ』では「cannot help ~ing=cannot help but+動詞の原形/cannot but 動詞の原形(文語)」、『アースライズ』では「cannot but do は堅い表現で、今ではほとんど使われない。」となっている。これは田中(1990: 217)の「cannot はかなり堅い表現のようで、現代英語で出会う機会はあまり多くなさそうである」なども参考にしたのかもしれない。

4. メリハリのある文法・表現の選択

各章を〈基本編〉〈発展編〉の2部構成にしたのは『デュアルスコープ』の先駆的な試みであった。総花的に文法を教えるのではなく、まず基本を固め、発展編では発展的であるが、重要なものや大学入試でよく出題されているものを扱っている。こんな表現はあまり使わないし覚える必要はないと思っても大学入試で依然として出題される場合にはなかなか割愛することはできない。この組み立ては『アースライズ』の First Stage, Second Stage の2本立てに引き継がれている。

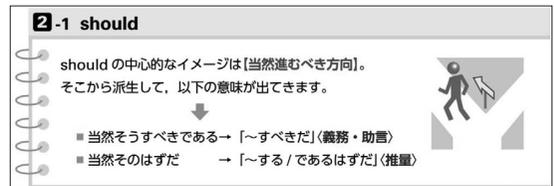
例えば、〈as soon as ...〉は基礎編/First Stage に置き、〈hardly ... when〉や〈no sooner ... than〉は発展編/Second Stage に置くといった具合である。田中(1990: 75-81)でも前者と後者の間には頻度の差がかなりあり、鷹家・林(2004: 90-91)も指

摘しているように英語母語話者にも少し難しいものようである。あまり使わないようであり、発信レベルでは、as soon as ...で十分用を足せる。指導する際はこの点に留意する必要がある(三村 2017)。

5. 認知言語学・レキシカル・グラマーの知見

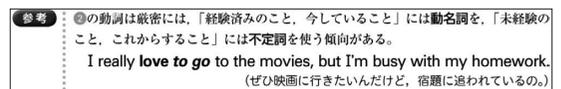
認知言語学はレイコフの邦訳『認知意味論』が出版された1983年あたりから英語教育に影響を与え始めてきた。筆者はあまりこの分野に関心をもてこなかったが、10年ほど前から佐藤・田中(2009)を契機に特にレキシカル・グラマーに興味をそそられ、執筆において、説明のわかり易さの観点から、認知言語学、レキシカル・グラマーの知見を取り入れるようにしてきた。『アースライズ』から2点紹介する。

① 助動詞のイメージをイラストで提示(p.110)



このように示すことで、「義務・助言」と「推量」が別個のものでなくて、コアの部分でつながっていることが視覚的に理解されるだろう。

② 動詞の目的語になる不定詞と動名詞(p.212)



like や love など不定詞と動名詞の両方を目的語にとる場合は、意味はほぼ同じになるが、その違いに関心を抱く生徒のために参考で示した。『デュアルスコープ』よりもより簡潔に説明しようとした。

6. 現場での指導を反映

高校生を指導していると、生徒の共通したエラーに遭遇する。エラーを分析してライティングの指導に生かせないかと考えて、小篠敏明(編)(1983)をきっかけにデータを集めるようになった。分析の結果は三村(2018)などで発表してきた。また、『ラーナーズ』の「誤答チェック」、『デュアルスコープ』の Typical Mistakes などで具体的に取り上げながら、本文の執筆にも生かしてきた。ここではエラーを2つだけ取り上げたい。

「これがあなたに先日お話ししたイタリアについての本です。」

* This is the book I told you the other day about Italy.

the book は told you の後に続く間接目的語を先行詞化したつもりであろうが, *I told you the book という第4文型は成立しないので, you の後に about を置く必要がある。

「おいしくて見た目もきれいな料理を用意するのは大変だった。」

* It was hard to prepare for dishes which taste good and look nice.

「～の準備[用意]をする」は prepare, prepare for が対応するが, 食事などを用意する場合は prepare を他動詞で用いる。prepare for は「～に備える, ～のために準備する」のイメージである。したがって, prepare an exam は「試験問題を準備する」で, prepare for an exam は「試験のために準備する」という意味になる。

冠詞は奥が深く, 私自身も自分が英文を書く際にいまだに苦勞している。生徒にはあまり神経質にならないように指導しているが, 授業で扱う場合は説明が当然必要となる。先日も授業で次の和文英訳を扱った。

「世界のすべての子供たちが教育を受けられるわけではない。」

指名した生徒の板書を添削した後, 解答例を提示した。

Not all children in the world can get[receive] an education.

授業が終わってから, 一人の生徒から receive education ではダメですかと質問があった。確かに漠然と「教育」という意味では education もありうるのでその場では OK と答えた。解答例の an education は学校教育という具体的なものをイメージしているので an がついているとも説明した。久野・高見(2004: 10)にあるように抽象名詞が「個々の具体的な事柄を表す場合は冠詞を伴います」ということになる。因みに COCA の検索では, get an education が圧倒的に多く, get education, receive an education, receive education には数の大きな違いはなかった。

7. おわりに

英語教員としてのキャリアは 48 年目を迎えてい

るが, 馬齢を重ねただけで, 教授者だけでなく学習者としての到達点は見えてこない。英文を書いても上達してきたのかと反省しきりである。また, 教材執筆者としてもまだまだと思っている。英語の実態や文法理論についてももっと学習する必要があると感じている。There is no royal road to learning. であり, There is no royal road to teaching. であることを肝に銘じてこれからも生徒に向き合いながら, よりわかりやすい指導, よりわかりやすい教材の執筆に精進していきたい。

参考文献

- 金山崇(監修)(1989). 『REFRESH 高校基礎英語』数研出版。
- 河上道生(1980). 『英語参考書の誤りを正す』大修館書店。
- 小篠敏明(編)(1983). 『英語の誤答分析』大修館書店。
- 久保野雅史(2016). 「高校文法教科書はなぜ9年で消えたのか」『神奈川大学心理・教育研究論集第40号』, 17-27.
- 久野暉・高見健一(2004). 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』くろしお出版。
- 田中茂範(1990). 『データに見る現代英語表現・構文の使い方』株式会社アルク。
- レイコフ, ジョージ(1983). 『認知意味論: 言語から見た人間の心』(池上嘉彦他訳)紀伊国屋書店。
- 三村浩一(2017). 「英文法をどこまで教えるのか? —Fluency or Accuracy?」『帝塚山学院大学教職実践研究センター年報第2号』10-15 帝塚山学院大学。
- 三村浩一(2018). 「高校生のライティングにおける文法・構文のエラーについて」『帝塚山学院大学教職実践研究センター年報第3号』15-20 帝塚山学院大学。
- 佐藤芳明・田中茂範(2009). 『レキシカル・グラマーへの招待 新しい教育英文法の可能性』開拓社。
- 鷹家秀史・林龍之介(2004). 『詳説 レクシスプラネットボード—103人のネイティブスピーカーに聞く生きた英文法・語法』旺文社。

(帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校 常勤参与・

帝塚山学院大学 非常勤講師)